

アチャンマの幼蟲の記載と其生態

木下周太・小尾充雄・洞澤 勇

Descriptive and Oecological Notes on the Larva of
Aeschnophlebia longistigma DE SELYS-LONGCHAMPS.

By S. KINOSHITA, M. OBI, and I. HORASAWA.

幼蟲の記載は木下・洞澤の手に成り、幼蟲の生態は小尾が主として観察したものである。

1. 記 載

測定 単位 mm.

番 號	體 長	頭 幅	頭 長	觸 角 長	假 面 長	假 面 幅	後 腿 節 長
1	37	9	6.5	3	7	5.5	6.5
2	40	9	6.5	3	7.5	5.9	7.5
3	48	9	6.5	3	7	5.9	7
4	43	8.7	7	3	7.5	6	6.5
5	41	9	7	3	7	5	6.5

色 彩 暗黄褐色に灰黒の斑紋を散在するか乃至は全體一樣に黒褐である。淡色の個體では腹部背線及側線位に濃色の縦帯が走り、此兩帶の間は黄褐色で染められ顯著な色彩を現はす。但し是等の縦帯は腹端の數節では不明瞭であるか或は消失する。又黒褐色の個體では此縦帯は甚だ不明である。

頭 部 前方に向つて扇狀に廣がり、後角鈍く突出し、後縁は淺く弧狀に割られて居る。側縁には眼と後角とに互る鈍い隆條があつて之より外側は截斷されて居る。眼は黒褐色、後内角は互に約2耗相隔たる。觸角の各節の

長さの比は 7:10:11:10:11:13:19. 第一節は短太、第二節は太いが長く、夫々の長さとの幅の比は 7:11, 10:7. 他の諸節は刺毛状。

口 器 假面(下唇腮部)は中脚基節の後端まで達し、略中央から前方は弧状に外方に擴張し、側縁には鋭棘を列生する。前縁は縁毛に装はれ、其中央に浅い缺刻があるが其内半は閉ちて居る。側葉は末端圓く後方に屈曲し鋭鉤に終り、其内縁は鋸齒に縁取られるが、各齒端は丸い。動鉤は内面の基半に短刺毛の少数を生じて居る。動鉤と側葉外縁の長さの比は 18:14. 大顎

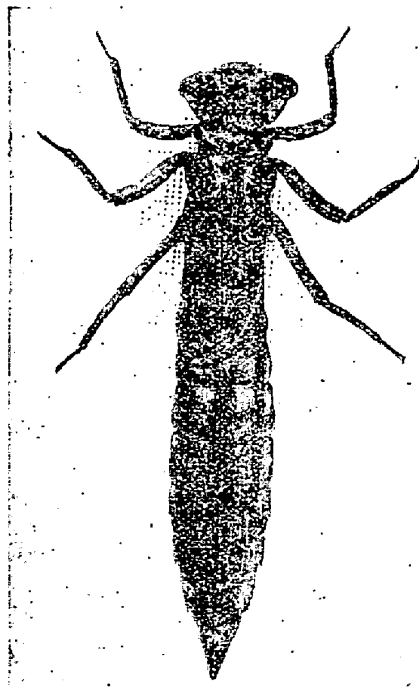


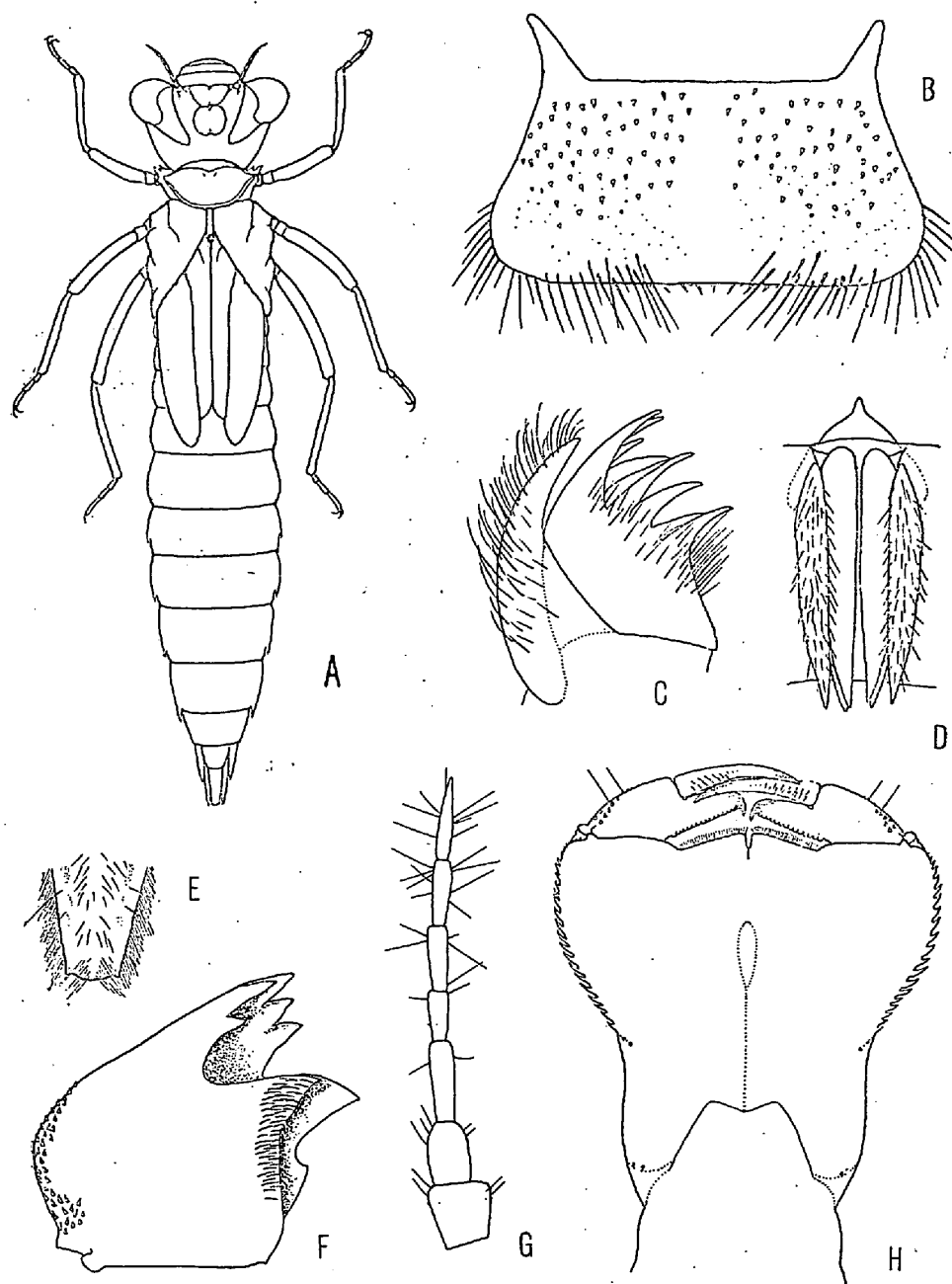
插圖 1. アフヤンマ幼蟲(× 1.5)。

は前葉に 5 齒を具へ、其内前端的 1 對は最長である。同後葉には幅廣い 2 大齒があり、其一つには基部に近く 1 小齒を附屬する。小顎は内葉に長い 8 鋭齒を生じて居る。

胸 部 前胸背面には各前外角に 1 小棘がある。此基部からは後内方に向ふ 1 彎曲隆條があつて後縁に達して居る。前胸側面の下方、即ち前脚基節の直上位には、前方に 2 小突起があるが、其外方のものは顯著である。又側面にも鈍い小突起がある。翅芽は第四腹節の後半迄伸長する。後脚の腿節は第三腹節を少しく超える。

腹 部 側棘は第 6-9 節に存するが、第 6 節のものは甚だ微小、爾餘の棘は後方のものほど幾分大きくなる。雌の産卵管は第 9 節の全長に互り、尙ほ第 10 節の前部に伸出する。

肛 附 屬 器 上附屬物は末端鈍い截斷型、兩後角は少しく突出する、下附屬物は上附屬物と殆んど同長 (3.5 耗)、側附屬物 (2 耗) は前兩者の半長を少しく超へる。



挿圖 2. A. アラヤンマ幼蟲 (×1.5)。B. 上唇 (×19)。C. 小顎 (×19)。
 D. 産卵管 (×8)。E. 上附屬物末端 (×19)。
 F. 大 顎 (×19)。G. 觸角 (×19)。H. 假面 (×9)。

2. 生 態

棲息場所 未だ廣く採集をしておらないが東京近郊の2個所でアヲヤシマの幼蟲を得た。そして此兩個所とも環境はよく似て居た。其の一つは府下野方町にある幅3尺長さ5間、深さ1尺許りの水溜りで（挿圖 3）周邊はヨシ其他の禾本科植物等が繁茂して居て、溝底は軟かい泥が深い。此水溜は主として周圍の濕潤地から集成され、流れ口も排け口もない停滯した水を湛えて居て、其の水は常に濁つて居る。他の1個所は王子町の池であるが、其附近一帯は底地で、池は周圍凡そ2町位はあらう。岸は矢張りヨシ其他の水草に縁取られ、此部分の水は、1尺許の深さである。そして水は雨水及湧出水の溜つたものであるが汚水ではなく、平常は稍澄んで居る。私は斯うした場所の周縁の水草から前記の幼蟲を捕へた。同じ時季に野方町の灌漑用の小



挿圖 3. アヲヤシマ幼蟲の棲息場所。

川、玉川流域及練馬町の小川を漁つたが、他の蜻蛉の幼蟲は多數に得られたがアヲヤシマの幼蟲は遂に1頭も採集されなかつた。此の結果から見ると此蜻蛉の幼蟲は停滯して有機質に富んだ水中に棲息するものであつて流水若くは清澄な水中には産せぬのではなからうかと思はれる。

採集 野方町の永溜からは本年五月十一日に 12 頭、六月二十五日に 1 頭を得た、何れも老熟に近く、體長 36-45 耗、頭幅 7-9 耗。其内でも體長 40 耗以上、頭幅 9 耗以上のものが大部分を占めて居た。次で八月初旬に同所に採集を試みたが此際は 1 頭も得られなかつた。此事は王子町の採集の模様と後記の羽化記録とに照合するとアチャンマの羽化期は既に終つて居た事を示すのではなからうかと思はれる。

次に王子町の池は八月二十三日に漁つたのであるが、穫られた幼蟲は 11 頭、何れも甚だ小さく、體長 11-19 耗、頭幅 3.5-5 耗で、明かに本年の仔であることを示した。

羽化 飼育幼蟲の中 8 頭が羽化を了した。そして羽化は總て早朝に行はれたのである。本年に於ける羽化の記録は次表の通りである。

月 日	VI,3	VI,11	VI,12	VI,16	VI,19	VII,1	VII,19
頭 数	1	1	2	1	1	1	1

世代 野方町で得た幼蟲と王子町で採つた幼蟲との大さには格段の差があつて、中間の大きさのものは一つも見出されなかつた。此から推測すると、後者は明年六、七月頃までに十分に成育して羽化するのではなからうか、さすれば即ちアチャンマは年 1 世代であらう。

習性 飼育した少數の個體を観察しただけで未だ突きつめてない。一般登攀幼蟲の習性と特に變つた點は見出されなかつた。本幼蟲は他物につかまつて居るときは常に頭を上にして居る。手其他の物を近づけると、楯に取る様に枝極を繞つて隠れ、尙之を追ふて行くと遂には尾端から噴水して水中を逃避する。幼蟲を捕へると擬死して、或時は脚を縮めて舟形に反りかへり、或時は脚を縮めたまま體を下けるが、此姿態は發育中の時期によつて差があるのではなからうか。例へば、小形の幼蟲及羽化前のものは多く後の姿態をとる様である。飼育中はユリミミズ一種とミヂンコ一種を與へたが之でよく成育した。此幼蟲は體色が濃褐であるのみならず、屢水藻の類を托生して居るから、之によつて外敵を免れる機會も多からうと思はれる。尙ほ詳細な觀察は後日に期したい。